

しよかつりよう【諸葛亮】 (181～234) 中国、三国時代の蜀漢(しよつかん)の宰相。大辞林 第三版の解説

字(あざな)は孔明。劉備に三顧の礼を受けて仕えたと伝えられ、天下三分の計を上申、劉備の蜀漢建国を助ける。劉備死後、子の劉禪を補佐し、五丈原で魏(ぎ)軍と対陣中死去。 ↓ 出師(すいし)の表 大辞林 第三版の解説

おうさ【王佐】 王を補佐すること。「一の才」

したいふ【士大夫】 ① 中国で、士と大夫。また、科挙出身の高級官僚。大辞林 第三版の解説  
↓ 卿大夫士(けいたいふし) ② 高い官職にある高潔の人。

けいたいふし【卿大夫士】 中国、周代の天子直轄地における臣下の三身分。上位より卿・大夫・士。また諸侯の臣下には大夫・士があり、特に上大夫は卿と称された。大辞林 第三版の解説

ふくりようほうすう【伏竜鳳雛】 「三国志蜀書諸葛亮伝注」より。三国時代、司馬徽が蜀の諸葛孔明(しよかつこうめい)を伏竜にたとえ、龐士元(ほうしげん)を鳳凰の雛(ひな)にたとえたことから。 まだ世に知られていない大人物と有能な若者のたとえ。臥竜(がりよう)鳳雛。

さんこ【三顧】 「諸葛亮「前出師表」より。蜀(しよく)の劉備(りゆうび)が諸葛亮を軍師に迎えようとして、その庵(いおり)を三度訪れた故事による」 人に仕事を頼むのに、何度も訪問して礼を尽くすこと。「一を尽くす」 大辞林 第三版の解説

すいぎよのまじわり【水魚の交わり】 「三国志 蜀書諸葛亮伝」 離れがたい非常に親密な交際のたとえ。水魚の親。水魚の思い。 デジタル大辞泉の解説

しよく・かん【蜀漢】 ↓ しよつかん(蜀漢) 大辞林 第三版の解説  
しよっ・かん【シヨク・カン】 【蜀漢】 中国、三国の一。正式の国号は漢。後漢滅亡後の221年、蜀(四川)地方を中心に漢の景帝の後裔(こうえい)である劉備が建てた国。都は成都。263年、魏(ぎ)に滅ぼされた。蜀。

すいしのひょう【出師の表】 中国、蜀(しよく)の丞相諸葛亮(しよかつりよう) (孔明)が227年出陣に際し、後主劉禪(りゆうぜん)に奉じた上表文。先主劉備の遺徳を高めるように説いたもので、誠忠の情あふれた名文として有名。ほかに「後出師の表」(228年)がある。 大辞林 第三版の解説

ききゆうそんぼう【危急存亡】 危機が迫って、生き残るか滅びるかという重大な瀬戸際(せとぎわ)。 「一の秋(とき)」 「諸葛亮「前出師表」より。「ききゆうぞんぼう」とも」 大辞林 第三版の解説

しちしようにしちきん【七縦七擒】 諸葛孔明が敵将孟獲を七度擒(とりこ)にし七度縦(はな)った故事をいう語。 大辞林 第三版の解説

しよく、の、さんどう「サンダウ」【蜀の栈道】 中国四川省北部、劍閣から北へ、陝西(せんせい)省の南部に通じる険しい道。蜀と長安を結ぶ交通の難所として知られた。

大辞林 第三版の解説

もくぎゅうりゅうば【木牛流馬】 中国、蜀の諸葛孔明が創案したといわれる兵糧運搬用の車。牛馬にかたどり、機械仕掛けで運行する。ぼくぎゅうりゅうば。

デジタル大辞泉の解説

しよかつ、さい【諸葛菜】アブラナ科の一年草。高さ30〜60センチ。根は白くまっすぐ伸び、葉はダイコンに似る。3〜5月、藤色の4弁花を総状につける。中国の原産で江戸時代に渡来。むらさきはなな。はなだいこん。《季 春》「足元にともむらさき―/時彦」

デジタル大辞泉の解説

泣(な)いて馬謖(ばしよく)を斬(きる) 《中国の三国時代、蜀(しよく)の諸葛孔明(しよかつこうめい)は日ごろ重用していた臣下の馬謖が命に従わず魏に大敗したために、泣いて斬罪に処したという「蜀志」馬謖伝の故事から》規律を保つためには、たとえ愛する者であっても、違反者は厳しく処分することのたとえ。

デジタル大辞泉の解説

将星(しょうせい)隕(お)つ 《蜀(しよく)の諸葛孔明(しよかつこうめい)が五丈原で死んだとき、大星が陣中に落ちたという「蜀書」諸葛亮伝の故事から》将軍が陣中で死ぬ。英雄・偉人が死ぬ。

デジタル大辞泉の解説

死(し)せる孔明(こうめい)生(な)ける仲達(ちゆうたつ)を走(は)らす 《「蜀志」諸葛亮伝・注から》中国の三国時代、蜀(しよく)の諸葛孔明(しよかつこうめい)が魏の司馬仲達と五丈原で対陣中に病死したため、軍をまとめて帰ろうとした蜀軍を仲達はただちに追撃したが、蜀軍は孔明の遺命に基づいて反撃の構えを示したため、仲達は孔明がまだ死んでおらず、何か策略があるのだろうと勘ぐり退却したという故事。生前の威光が死後も残っており、人々を畏怖させるたとえ。

大辞林 第三版の解説

しばい【司馬懿】 (179〜251) 中国三国時代、魏(ぎ)の将軍・政治家。字(あざな)は仲達(ちゆうたつ)。蜀の諸葛亮の北征を五丈原にしりぞけ、のち魏の実権を掌握。孫の司馬炎(西晋の武帝)から宣帝と諡(おくりな)された。

デジタル大辞泉の解説

ちん、じゅ【陳寿】 [233〜297] 中国、西晋の歴史家。安漢(四川省)の人。字(あざな)は承祚。蜀(しよく)に仕え、蜀の滅亡後は晋の張華に認められて著作郎となり、「三国志」を編集した。

吉川英治『三国志』篇外余録より引用

頼山陽の題詩「仲達、武侯の営址を観みる図に題す」に、山陽はこういつている。

——公論ハ敵讐ヨリ出ヅルニ如カズ、と。

至言である。山陽は、仲達が蜀軍退却の跡に立って、

「彼はまさに天下の奇才だ」

と、激賞したと伝えられている、そのことばをさしていたのである。これ以上、孔明を論じ、孔明を是々非々してみる必要はないじゃないか——と世の理論好きに一句止(とど)めをさしたものとええよう。

だが、ここでもう一言、私見をゆるしてもらえらるなら、私はやはりこう云いたい。仲達は天下の奇才だ、といったが、私は、偉大なる平凡人と称(たた)えたのである。孔明ほど正直な人は少ない。律義実直である。決して、孔子孟子のような聖賢の円満でもなければ、奇矯なる快男児でもない。ただその平凡が世に多い平凡とちがって非常に大きいのである。

彼が、軍を移駐して、ある地点からある地点へ移動すると、かならず兵舎の構築とともに、附近の空閑地に蕪(かぶ) (蔓菁(まんせい)ともよぶ)の種を蒔(ま)かせたということだ。この蕪は、春夏秋冬、いつでも成育するし、土壌(どじょう)をえらばない特質もある。そしてその根から茎(くき)や葉まで生(なま)でも煮ても喰べられるという利便があるので、兵の軍糧副食物としては絶好の物だったらしい。

こういう細かい点にも気のつくような人は、いわゆる豪快英偉な人物の頭脳では求められないところであろう。正直律義な人にして初めて思いたる所である。とかく青い物の栄養に欠けがちな陣中食に、この蕪(かぶ)はずいぶん大きな戦力となったにちがいない。戦陣を進める場合も、そのまま、捨てて行って惜し気もないし、また次の大地ですぐ採取することができる。で、この蔓菁(まんせい)の播植(はしょく)は、諸所の地方民の日常食にも分布されて、今も蜀の江陵地方の民衆のあいだでは、この蕪のことを「諸葛菜(しょかつさい)」とよんで愛食されているという。(引用終わり)

土井晩翠『天地有情』「星落秋風五丈原」  
祁山悲秋の風更けて／陣雲暗し五丈原／零露の文は繁くして／草枯れ馬は肥ゆれども／蜀軍の旗光無く／鼓角の音も今しづか。 … (略) … 草廬にありて龍と臥し／四海に出で、龍と飛ぶ／千載の末今も尚／名はかんばしき諸葛亮。

[http://www.aozora-gr.jp/cards/001081/files/42233\\_38066.html](http://www.aozora-gr.jp/cards/001081/files/42233_38066.html)

題司馬仲達觀武侯宮址圖 (『山陽遺稿』詩五卷四、出版者・山本重助、明治十二年刊)



死諸葛 生仲達 吾能料生不料死 此語大痴乃小點  
却有天下奇才目 足見姦雄心真服  
壽曰管蕭流 甫曰伊呂儔 後儒贊頌雷同耳 不若公論出敵讎

司馬仲達、武侯の宮址を觀る圖に題す  
死せる諸葛、生ける仲達。「吾能く生を料るも死を料らず」。此の語、大痴なれども乃ち小點なり。却つて天下の奇才の目有り。姦雄の心、真に服するを見るに足る。壽は曰

ふ、管簫の流と。甫は曰ふ、伊呂の儔と。後儒の賛頌は雷同なるのみ。若かず、公論の敵讐より出づるに。

頼山陽、文政十二年(1829)の作

〔注〕

大痴乃小黠「小黠大痴」(こざかしくふるまうが実はとても愚かである)の逆。

寿日正史『三国志』の陳寿の評「可謂識治之良才、管蕭之亞匹矣」。

甫日杜甫の詩「詠懷古跡」に「伯仲之間見伊呂」(殷の伊尹、周の呂尚と伯仲している)「大意」

司馬懿が諸葛孔明の陣営のあとを見る様子を描いた絵図に書きつけた漢詩。

死せる諸葛孔明、生ける司馬仲達を走らす。五丈原の最後の戦いの後、司馬懿こと司馬仲達は「私は、生きている者の考えはわかるが、死んだ者の考えはわからない」と、悔しまぎれの言い訳を述べた。この言葉は、愚かな中にも少し機知を感じる。また司馬懿は、撤退した蜀軍の陣営のあとを見て、孔明の才能に瞠目し「天下の奇才なり」と評した。奸智にたけた英雄である司馬懿が、本当に孔明に心服したことが、わかる。

後世の知識人の孔明評は、どれも陳腐だ。歴史家である陳寿は、孔明をいにしえの管仲や蕭何になぞらえて高く評価した。大詩人である杜甫は、孔明を伊尹や呂尚に匹敵すると賞賛した。これらはどれも、結局はステレオタイプの評価にすぎない。孔明を相手に戦った司馬懿による孔明評には、及ばない。

敵として戦ったライバルから出た評価が、いちばん公平だ。

〔評〕血戦の相手からの「逆感状」は、凡百の批評より重みがある。

江戸の川柳『誹風柳多留全集』『誹風柳多留捨遺』  
<http://www.ic.daito.ac.jp/~oukodou/kyosaku/nanjiyaina.html> より

どれ程な事か孔明首をまげ (13篇)

孔明が死んで夜講の入りが落ち (64篇)

三つ山でご承知ならと諸葛亮 (18篇)

燈明が消えたで蜀が闇になり (77篇)

今日もまた留守でござると諸葛亮 (26篇)

蜀将に孔明さんは妙にきき (119篇)

孔明がさそうひようたん雨に濡れ (38篇)

孔明が木馬仲達うまく乗り (124篇)

萬卒を孔明羽根でたたむなり (43篇)

さあ琴だ孔明何か弾いている (126篇)

松風をくらつて司馬懿引き返し (46篇)

孔明も三會目から帯をとき (捨4篇)

鼎足を一本へし折る五丈原 (61篇)

【劉備、蜀で即位】十八史略

昭烈皇帝諱備、字玄德、漢景帝子中靖王勝之後。有大志。少言語、喜怒不形。身長七尺五寸。垂手下膝、顧自見其耳。蜀中传言、曹丕篡立、帝已遇害。於是漢中王、發喪制服、諡曰孝愍皇帝。夏四月、即帝位於武擔之南、大赦、改元章武。以諸葛亮為丞相、許靖為司徒。立宗廟、禘祭高皇帝以下。立夫人吳氏為皇后、子禪為皇太子。

昭烈皇帝、諱(いみな)は備、字(あざな)は玄德。漢の景帝の子の中靖王勝の後(のち)なり。大志有り。言語少なく、喜怒形(あら)はさず。身の長(たけ)七尺五寸。手を垂るれば膝より下り、顧みれば自ら其の耳を見る。蜀中伝へて言ふ「曹丕篡立(さんりつ)して帝已に害に遇(あ)へり」と。是(こゝ)に於て漢中王、喪を發し服を制し、諡(おくりな)して孝愍皇帝(こうびんこうてい)と曰ふ。夏四月、帝位に武担の南に於て即き、大赦して章武と改

元す。諸葛亮を以て丞相と為し、許靖(きよせい)を司徒と為す。宗廟を立て、高皇帝以下を袷祭(こうさい)す。夫人の呉氏を立てて皇后と為し、子の禪を皇太子と為す。

【君、みずから取るべし】十八史略

昭烈臨終謂亮曰、君才十倍曹丕。必能安国家、終定大事。嗣子可輔輔之。如其不可、君可自取。亮涕泣曰、臣敢不竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死。

昭烈、終りに臨んで亮に謂ひて曰く「君の才は曹丕に十倍せり。必ず能く国家を安んじ、終(つひ)に大事を定めん。嗣子、輔く可くんば之を輔けよ。如(も)し其れ不可ならば、君、自ら取る可し」と。亮、涕泣(ていきゅう)して曰く「臣、敢て、股肱(ここう)の力を竭(つく)して忠貞の節を效(いた)し、之に繼ぐに死を以てせざらんや」と。

【七縦七禽】十八史略

南夷畔漢。丞相亮往平之。有孟獲者。素為夷漢所服。亮生致獲、使觀營陣、縱使更戰。七縦七禽、猶遺獲。獲不去曰、公天威也。南人不復反矣。

南夷、漢に畔(そむ)く。丞相亮、往(ゆ)きて之を平らぐ。孟獲なる者有り。素より夷・漢の服する所と為る。亮、獲を生致(せいち)し、營陣を觀(み)しめ、縦(ゆる)して更に戦はしむ。七縦七禽(しちしようしちきん)、猶ほ獲を遣(や)る。獲、去らずして曰く「公は天威なり。南人復た反せず」と。

【出師の表】十八史略

漢丞相亮、率諸軍北伐魏。臨發上疏曰、今天下參分、益州疲弊。此危急存亡之秋也。宜開張聖聽、不宜塞忠諫之路。宮中・府中、俱為一体。陟罰臧否、不宜異同。若有作姦犯科及忠善者、宜付有司論其刑賞、以昭平明之治。親賢臣遠小人、此先漢所以興隆也。親小人遠賢臣、此後漢所以傾頽也。臣本布衣、躬畊南陽、苟全性命於乱世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、參顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、許先帝以驅馳。先帝知臣謹慎、臨崩、寄以大事。受命以來、夙夜憂懼、恐付託不效、以傷先帝之明。故五月渡瀘、深入不毛。今南方已定、兵甲已足。當獎率參軍、北定中原。興復漢室、還于旧都、此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。遂屯漢中。

漢の丞相・亮、諸軍を率ゐて北のかた魏を伐つ。発するに臨み、上疏(じょうそ)して曰く「今、天下參分し、益州疲弊せり。此れ危急存亡の秋(とき)なり。宜しく聖聽を開帳すべく、宜しく忠諫(ちゅうかん)の路を塞ぐべからず。宮中・府中は俱(とも)に一体たり。臧否(ぞうひ)を陟罰(ちよくばつ)するに、宜しく異同あるべからず。若し、姦を作(な)し、科を犯し、及び忠善の者有らば、宜しく有司に付して其の刑賞を論じ、以て平明の治を昭(あきら)かにすべし。賢臣に親しみ小人を遠ざくるは、此れ先漢の興隆せし所以なり。小人に親しみ賢人を遠ざくるは、此れ後漢の傾頽(けいたい)せし所以なり。臣、本(もと)布衣(はい)、南陽に躬畊(きゅうこう)し、性命を乱世に苟全(こうぜん)して、聞達(ぶんたつ)を諸侯に求めず。先帝、臣が卑鄙(ひひ)なるを以てせず、猥(みだ)りに自ら枉屈(おうくつ)して、臣を草廬(そうろ)の中に參顧し、臣に諮(と)ふに當世の事を以てす。是に由(よ)りて感激し、先帝に許すに驅馳(くち)を以てす。先帝、臣の謹慎なるを知り、崩ずるに臨み、寄するに大事を以てせり。命を受けてより以来、夙夜(しゆくや)憂懼(ゆうく)し、付託の效(こう)あらずして、以て先帝の明を傷(そこな)はんことを恐る。故に五月、瀘(ろ)を渡り、深く不毛に入る。今、南方、已に定まり、兵甲、已に足る。當(まさ)に參軍を獎率(しょうそ)して、北のかた中原を定むべし。漢室を興復し、旧都を還(かへ)さんことは、此れ臣が先帝に報いて陛下に忠なる所以の職分なり」と。遂に漢中に屯す。

【女衣巾幗】十八史略

亮數挑懿戰。懿不出。乃遣以巾幗婦人之服。亮使者至懿軍。懿問其寢食及事煩簡、而不及戎事。使者曰、諸葛公夙興夜寐、罰二十以上皆親覽。所噉食、不至數升。懿告人曰、食少事煩、其能久乎。

亮、數々、懿に戦ひを挑む。懿、出でず。乃ち遣(おく)るに巾幗(きんかく)婦人の服を以てす。亮の使者、懿の軍に至る。懿、其の寢食及び事の煩簡を問ひて、戎事(じゅうじ)に及ばず。使者曰く「諸葛公、夙(つと)に興(お)き、夜に寢(い)ね、罰二十以上は皆、親(みずか)ら覽(みる)。噉食(たんしょく)する所は數升に至らず」と。懿、人に告げて曰く「食少なく事煩はし、其れ能(よ)く久しからんや」と。

【死せる諸葛、生ける仲達を走らす】十八史略

亮病篤。有大星、赤而芒、墜亮營中。未幾亮卒。長史楊儀整軍還。百姓奔告懿。懿追之。姜維令儀反旗鳴鼓、若將向懿。懿不敢逼。百姓為之諺曰、死諸葛、走生仲達。懿笑曰、吾能料生、不能料死。亮嘗推演兵法、作八陣圖。至是懿案行其營壘、歎曰、天下奇材也。

亮、病ひ篤(あつ)し。大星有り、赤くして芒あり、亮の營中に墜つ。未だ幾(いくばく)ならずして亮、卒す。長史・楊儀、軍を整へて還る。百姓、奔(は)しりて懿に告ぐ。懿、之を追ふ。姜維(きょうい)、儀をして旗を反(か)へし鼓を鳴らし、將(まさ)に懿に向かはんとするが若(ごと)くせしむ。懿、敢て逼(せま)らず。百姓、之が為に諺(ことわざ)して曰く「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」と。懿、笑ひて曰く「吾、能(よ)く生を料(は)か(れ)ども、死を料(は)すこと能はず」と。亮、嘗て兵法を推演し、八陣の圖を作る。是(こゝ)に至りて、懿、其の營壘を案行し、歎じて曰く「天下の奇材なり」と。

【泣いて馬謖を斬る】十八史略

亮為政無私。馬謖素為亮所知。及敗軍流涕斬之、而卹其後。李平・廖立、皆為亮所廢。及聞亮之喪、皆歎息流涕、卒至發病死。史稱、亮開誠心、布公道。刑政雖峻而無怨者。真識治之良材。而謂其材長於治國、將略非所長、則非也。初丞相亮、嘗表於帝曰、臣成都有桑八百株、薄田十五頃。子弟衣食自有餘。不別治生以長尺寸。臣死之日、不使內有餘帛、外有贏財、以負陛下。至是卒。如其言。諡忠武。

亮、政を為すに私(わたくし)無し。馬謖(ばしょく)素より亮の知る所と為る。軍を敗(やぶ)るに及び、涕(なみだ)を流して之を斬り、而(しか)して其の後を卹(あは)れむ。李平・廖立(りょうりつ)、皆、亮の廢する所と為る。亮の喪(そう)を聞くに及び、皆、歎息流涕(りゅうてい)し、卒(つひ)に病を發して死するに至る。史に稱す「亮、誠心を開き、公道を布(し)く。刑政(けいせい)、峻(しゅん)なりと雖も而も怨む者無し。真に治(ち)を識るの良材なり」と。而して「其の材、國を治むるに長じて、將略は長ずる所に非ず」と謂ふは則ち非なり。初め丞相・亮、嘗て帝に表して曰く「臣、成都に桑八百株、薄田十五頃(けい)有り。子弟の衣食、自(おの)ずか(ら)余り有り。別に生を治めて以て尺寸(せきすん)を長ぜず。臣死するの日、内に余帛(よはく)有り、外に贏財(えいざい)有りて以て陛下に負(そむ)かしめず」と。是(こゝ)に至りて卒(しゆつ)す。其の言の如し。忠武と諡(おく)り(な)す。

以上